2/10 東福

「戦闘」表現 見直し指示

河野統幕長、南スーダン部隊に

南スーダンＰＫＯ派遣部隊の日報問題について、記者会見する河野克俊統合幕僚長＝９日午後、防衛省で

防衛省制服組トップの河野克俊統合幕僚長は九日の定例記者会見で、南スーダンＰＫＯ派遣部隊の日報の「戦闘」との表現を巡り、「言葉の意味を認識するよう現場部隊に指示した」と述べた。表現を問題視する国会での野党の追及などを受けて、今後は政府見解に合わせ「戦闘」と「武力衝突」の意味を使い分けるとの考えを示したものだ。

河野氏は「戦闘という言葉を使うなという意味ではない。こういう（国会などの）議論に発展する可能性があるので、意味をよく理解させるということだ」と強調した。ただ、現場が政府見解の「戦闘行為」に当たると状況判断したとしても表現をためらう恐れもあり、議論を呼びそうだ。

河野氏は「目の前で銃弾が飛び交っていたのは事実。目で見た状況を一般的な意味で書いたもので、（日報は情勢を判断する）情報源の一つ」と説明。紛争当事者間の停戦合意などＰＫＯ参加五原則に関しては、参加各国の状況や大使館の判断などを踏まえ「政府全体として五原則に抵触する状況には至っていないと判断した」と話した。

政府は「戦闘行為」について「国際的な武力紛争の一環として行われる、人を殺傷し、または物を破壊する行為」と定義。「戦闘」が起きたら、憲法やＰＫＯ五原則に抵触する恐れがあり、野党は「戦闘を武力紛争と言い換え、憲法九条違反を免れようとしている」などと批判している。

河野氏は「自衛隊は九条のもと（活動に）制約がかかっている。戦闘という言葉の意味を自衛官全体が知っておく必要がある」とも述べた。

また「廃棄済み」とした日報の保管が判明してから約一カ月間、担当部署が稲田朋美防衛相に報告しなかったことについて「発見した昨年十二月二十六日時点で報告すべきだった」と不備を認めた。

隊員家族 募る不信

南スーダンＰＫＯ派遣部隊の日報に「戦闘」との厳しい現地情勢が記されていた問題で、日本にいる派遣隊員の家族は、防衛省の対応に不信感を募らせた。

「防衛相が『戦闘』を『武力衝突』と言葉を言い換えて、現地が安全かのように表現するなんて、国民をばかにしている」と憤るのは、息子（四三）が現地のＰＫＯ施設内で道路整備などを担当している青森県藤崎町の新谷弘美さん（七五）だ。

昨年十一月中旬、青森空港（青森市）で見送った息子に、神社で買ったお守りを手渡した。派遣部隊に関する新聞記事を見掛けると「目を皿のようにして読んでいる。とにかく無事で帰ってくるのを待つしかない」。

二十代の息子が現地で活動する青森市の男性会社員（五七）は「戦闘があったと認識しているなら、家族に報告するのが筋だ。不安を抱えながら送り出した家族を何だと思っているのか」と語気を強めた。

頻繁に連絡を取っている息子の話では、活動場所は比較的穏やかな様子だという。

「戦闘」と記した日報を明らかにするのが遅れたことには「新任務を付与させるために余計な不安をあおりたくなかったのだろう。危険の度合いが低いから情報を伏せたのだと信じたい」と話した。